

# 朝師御書見聞管見

浅井 円道

はじめに

管見というのは、今回日蓮宗学全書の第十五・十六・十七巻所収の朝師御書見聞を通読したのですが、その精緻な注釈ぶりに恐れ入りました。しかも最初の遺文注釈書でしょう。

そのなか、このたびは朝師の「これはこれは」と感じ入った言葉を蒐集整理して、これを三点にまとめた結果の報告です。

感じたところを云えば、その他、現在の宗学者が遺文中の名句として等しく尊重している聖句について、朝師は案外に一言も言及していない箇所が多いことに気がきます。それはなぜか。このことを考えねばならぬところですね。それから、この問題は「余所に書するが如し」というて省略される場合も多い。余所とは他の遺文注釈書に限らず、広く朝師の全著作を検討しなければ、所在がわからない。これも重要な作業だと思えます。等々についても或る程度の用意をしたのですが、二十五分の発表時間ということで切りつめ、切りつめして三点にしました。さて、

## 一、遺文の中の用語の読み方

1、犬戎亂浪夷敵伺國等事 史記云犬戎戮幽王、愚童訓云、蒙古是犬子孫、日本則神末葉也、山海經云、黃帝曾孫奇明生白犬、白犬有三牝牡是爲大戎。私云東夷南蠻西戎北狄四方、エビス相替レリ、夷ユミモチエゾ、戎ホコイタダキエゾ、蠻カミミダレエゾ、狄カハキヌエゾ、牝音 牡音、博物志云東九夷、南六蠻、西七戎、北八狄、或抄（『種々御振舞御書』定九五九？）云文永五年、辰後正月自西戎牝狀渡之、同年東夷浮圖起累年之間合戰無斷絶也云云、（安國論私抄、15ノ六）

〈メモ〉夷・戎・蠻・狄の読み方がおもしろい。

2、牝字事 千字文云牝牝簡要 私云牝狀トハ、フムダト讀ベキヤラン可尋レ之。（同 15ノ二二）

〈メモ〉辞書を引くと、「牝」北周以後ハ表「牝」ふだ、役所のまわしぶみ」とあるから、ふだ↓フムダと詛したか。

3、臥屍爲觀者觀字ヲバミモノト可レ讀也、舊文章雖存見革之觀、飾以虎皮云言有之、文粹載之可レ思之、並レ戸作橋者、江河ヒキ捨タル體歟。三教指歸云鮮鱗生毛不退片食臥屍作觀流血爲川云云、（帝ヲ云也）

（同 15ノ三八）

〈メモ〉「臥屍爲觀」（安國論冒頭の文）の「觀」は「ミモノ」と讀まねばならぬといひ、その証拠に『本朝文粹』、空海の『三教指帰』の句を示している。岩波の文学大系本の『安國論』は頭註にこのよみを出している。4、尋云今ニハロキ者ノ手本ヲ架紵架紵云云、如何、答、世上ニ人ヲキヤツク等云ハ、架紵架紵云事也云云（開目抄見聞 15ノ二八五）

〈メモ〉『開目抄』に架紵架紵とあるのは今時世上で「キヤツク」（彼奴）と悪口するのと同じ意味だといふ

のか、あるいは桀紂が転訛してキヤツとなつたのだという意味か。再考

5、古抄云 一全雅、二三元政、三宗観、四寶月、五義眞、六法全、七惟謹、八元侶、圓仁於大唐値此八大徳玉へリ云云、(本尊問答抄見聞 17ノ八七)

〔メモ〕円仁の入唐八大徳の名の読み方。『日蓮聖人遺文辞典』は元政を「ゲンシヨウ」(安然の大法対受記による)、宗観を「シユウエイ」と表記する。元侶の名は遺文中にはみえないか。

## 二、珍らしい解説

1、斃巷事 或云斃ヘイ音畜類死スルヲタラレ物ト云是也、或云死依レ物申替也、凡人倫ニモ品有レ之、仍禮記云天子死曰崩、諸侯曰薨大夫曰卒、士曰不祿、庶人曰死云云、凡天子死崩御ト申ハ山、崩如ク世無レ隠云事也、又諸侯薨ト申ハ山、崩聲也、是無レ隠意也、其外吾朝ニテハ出家ヲバ圓寂、在家ヲバ他界ナンドト申、此等不レ亂可レ云事也、今牛馬オ、セテ斃書御座事文章勢、此等ニテアルベキ也、又后死昇霞云事アリ、(安国論私抄 15ノ三三四)

〔メモ〕階級による死の異称。

2、縦存其名等義破名借事有レ之也。或小有不當則有去取假令光宅因教果人四一ヲ立ルヲ破レ之、今家ニハ教行人理四一ヲ立玉フ、等也、凡光宅理一不レ立レ之因果ヲ存見タリ、今家破レ之玉フ様ハ、理印無レ之故同ニ魔説云云、或小有不當是ナルベシ、然ドモ今家四一ヲ立玉フ時、教一人一ヲバ光宅如ク立レ之玉ヘリ、是有取義也、因果不レ立二種行一立玉ヘリ、是有去云也、是則因果不同ナレドモ、行ト云ヘルハ從因至果進趣取義只行一ト立玉フ者也、今家此外理一ヲ立玉フ處ニテ理印有レ之、故同ニ魔説ニ失無レ之可レ思レ之 (同 15ノ一五二)

〈メモ〉法雲の『義記』の因效果人の四一を天台は『文句』方便品釈などにおいて教行人理の四一に改正したい  
きさつをのべる。

3、如法經ヲ行事ハ、大日經等眞言密教ニ移リ金蘇兩部、疏作ラレシ以前歟以後歟可レ尋レ之、尋云前後相如何、答杉洞  
如法經、淳和御宇天長十年癸丑（八三三）ナリ、入唐五十四代仁明御宇承和五年戊午ナリ、同十四年歸朝アリ、兩部、疏  
五十五代文徳御宇仁壽（元年（八五二）金疏）齊衡（二年（八五五）蘇疏）年號ナリ、理同事勝、義述玉フ事、天長承和  
嘉祥齊衡、五年號、經玉フト見タリ、サレバ如法經、時分ハ唯顯法華、行者ニテ御坐歟、（同 15ノ一八〇）

〈メモ〉円仁は一方では法華經の如法經の書写をおこない、一方では眞言密教を鼓吹したのではなく、はじめは  
如法經、二十二年のちに金蘇兩疏を書いたという。

4、尋云大唐儒者釋、三教有レ之、今何此等起盡不レ載、和漢兩朝無レ之加外道、儒外内三不同分別乎、凡弘法大師、三  
教指歸ト云ヘル書ハ儒道釋、三教ヲ上中下巻書レ之見タリ、今亦可レ然如何、答道家トハ仙術ヲ教等也、是ヲバ儒家ニ  
攝レ之只儒云テ儒外内、三云、仍儒教、上ニ外道置レ之、其上ニ置佛敎、玉フト見タリ、委如御書、（開目抄私見聞15  
ノ二二七—八）

〈メモ〉唐の文化や日本の空海の『三教指歸』は儒道釈を東洋思想の代表とするのに、なぜ聖人は儒外内とされ  
たのかの説明。うっかりして見落しがちなところである。

5、第二ノ鳳詔也者、私云三體詩第二茂陵詩、増註云、鄴中記詔書用五色紙、着木鳳口中ニ飛下端門、謂之鳳詔矣、  
或鈔云鳳詔旨也、鳳銜鳳勅繪旨繪言勅宣朝宣紫泥紫沼、同鈔云唐ニハ黃紙ニ書レ之、和ニハ黒紙ニ書レ之、幡磨國カ  
ヤノ郡ヨリ貢進也、カヤ紙ト云也。（同 15ノ三二六）

〈メモ〉鳳詔の異名、並びに紙の色や紙質についての説明。

6、此等ノ經文ヲ法華經ノ已今當六難九易ニ相對スレバ等者 尋云六難九易ト云ル分文ハ天台御釋ニハ不見如何、答妙樂御釋并山家御釋有レ之見タリ、五百問論下云經從諸餘典ニ至是則爲難者何耶、答曰總有六難一皆有對比、初五行說難、次、二行書難、次、二行讀難、次、二行說難、次、三行聽難、今謂分文甚善、(同) 15ノ三三二—三)

〈メモ〉聖人の造語である宝塔品の偈の「六難九易」という呼び名は、最澄の『法華秀句』の「多宝分身付屬勝九」と六祖妙樂大師湛然の『五百問論』下卷に由来するとの指摘。

7、御書云、玄義十卷一千丁等云云、或鈔云玄義十卷合四百丁、紙二百六十枚、一卷<sub>三十二</sub>二卷<sub>三十三</sub>三卷<sub>三十四</sub>四卷<sub>三十五</sub>五卷<sub>三十六</sub>六卷<sub>三十七</sub>七卷<sub>三十八</sub>八卷<sub>三十九</sub>九卷<sub>四十</sub>十卷<sub>四十一</sub> 釋籤十卷合四百丁、紙數二百二十枚、一卷<sub>六十二</sub>二卷<sub>四十三</sub>三卷<sub>四十四</sub>四卷<sub>四十五</sub>五卷<sub>四十六</sub>六卷<sub>四十七</sub>七卷<sub>四十八</sub>八卷<sub>四十九</sub>九卷<sub>五十</sub>十卷<sub>五十一</sub>、文句合四百九丁、紙二百二十五枚、一面七行紙、一卷<sub>八十二</sub>二卷<sub>八十三</sub>三卷<sub>八十四</sub>四卷<sub>八十五</sub>五卷<sub>八十六</sub>六卷<sub>八十七</sub>七卷<sub>八十八</sub>八卷<sub>八十九</sub>九卷<sub>九十</sub>十卷<sub>九十一</sub> 疏記十卷合七百九丁、紙三百五十五枚、一卷<sub>七十二</sub>二卷<sub>七十三</sub>三卷<sub>七十四</sub>四卷<sub>七十五</sub>五卷<sub>七十六</sub>六卷<sub>七十七</sub>七卷<sub>七十八</sub>八卷<sub>七十九</sub>九卷<sub>八十</sub>十卷<sub>八十一</sub> 止觀十卷合四百丁、紙二百三十五枚、一卷<sub>五十二</sub>二卷<sub>五十三</sub>三卷<sub>五十四</sub>四卷<sub>五十五</sub>五卷<sub>五十六</sub>六卷<sub>五十七</sub>七卷<sub>五十八</sub>八卷<sub>五十九</sub>九卷<sub>六十</sub>十卷<sub>六十一</sub> 弘決十卷合七百四十四丁、紙三百六十二枚、一卷<sub>六十二</sub>二卷<sub>六十三</sub>三卷<sub>六十四</sub>四卷<sub>六十五</sub>五卷<sub>六十六</sub>六卷<sub>六十七</sub>七卷<sub>六十八</sub>八卷<sub>六十九</sub>九卷<sub>七十</sub>十卷<sub>七十一</sub> 已上總合三千七百七十四丁、紙數千五百三十九枚 云云、

(撰時抄私見聞 15—四〇—)

〈メモ〉三大部の丁数の数を調べたところが珍しい。

8、御書云、弘法大師之十住心論秘藏寶鑰二教論等云云、眞言宗談義云、嵯峨宗論之後勅アル様ハ、現證ハ既見了、但宗宗淺深趣難レ知之歟、其重重可レ致ニ注進ニ之由宣旨アリ、其時十住心ヲ一卷ツ、ニ書レ之名ニ十住心論ニ獻レ之了、

即觀覽アテ云玉ヒケルハ、餘、ニ廣博ニシテ其理難辨云云、依レ之後省畧シテ寶鑰三卷被ニ書進一云云、

（同） 15—四—二二）

（メモ）天長六宗本書の一つ『十住心論』は十巻もあり、これを縮小せよとの勅令によつて『祕藏寶鑰』三巻としたという経緯は『聖愚問答抄』（定遺三六五）にみえるが、その典拠が示される。ただし「眞言宗談義」とのみあり、朝師著述、所持本等を検べる必要がある。

9、一切義成就菩薩六年苦行後、至善提樹下ニ金剛寶石上安座、先ニ道無爲心ニ住シテ爰本ヲ至極トシ玉フ處ヲ、金剛界、油麻、諸佛虚空現前、只今汝住處非至極、其外猶最極究竟祕密法有之驚覺シ玉フ時、サテハ左様極理有之耶ト云ヘル心地ニ進處ヲ第九住心ト云也、其後既密乘、三密四曼極理ニ悟入スル處ヲ第十ノ住心トスル也云云、守護經等ニ成毘盧遮那佛等ト云ヘルハ是ナルベシ、

（同） 15—四—三三）（同） 15—四—五—六cf）

（メモ）眞言宗では『守護国界主陀羅尼經』により、一切義成就菩薩（悉多太子）が成道したのは金剛界諸仏の「驚覺」によるという法門があるが、実は『法華經』の此土六瑞や神力品の十神力等も言葉をかえれば聴衆に対する「驚覺」である。御遺文にも「南無とは驚覺の義なり」（道場神守護事、定遺二二七四）とある。

10、尋云東寺義、天台華嚴所明妙覺佛尚名無明邊域見タリ、是三妄執外立微細妄執義門也云云其相如何、答此事眞言宗内東寺山門異義也、東寺意、鹿妄執細妄執極細妄執外立微細妄執、四妄執成歟、是大日經中、此四分一度於信解云文有之、此四分者三妄執外有微細妄執聞タリ、仍顯宗佛但斷三妄執不斷微細妄執、故尚無明邊域云也、尋云山門許此義歟如何、答不許之見タリ、其故ハ經論常途說、五住三惑外全不立三惑障、故大日經所說三妄執如次見思塵沙無明三惑ト見タリ、仍義釋云若一生度此三妄執即一生成佛、何論時分耶云ヘリ、但四分

之一文非惑障事、於初地以上以三句、大宗爲三分、此外立上上方便爲第四分、是於十地佛果功德立四分、至初地時至四分之一、故四分之一等說也、依之義釋云、於三句中更開佛地爲上上方便心、至第四心時名究竟一切智地、故曰此四分之一度於信解云へり、釋云三句、初地爲因、二地已去爲根、八地已上爲究竟佛地方、故從初地至佛地三句上加三上方便作四分也、全於惑障四分有之不見之、既違義釋末學爭可許之耶、若爾以天台等妙覺屬無明邊域義不可爾云云、或鈔云弘法大師立五重無明見タリ、不二無明、自一心無明、隨一心無明、多一心無明、八識無明云云、仍大日覺王ヲモ名不二無明、只是智品名也、非迷也云云

(同) 15ノ四一四)

〈メモ〉空海が『秘藏宝鑰』において天台宗の仏は「無明の辺域」なりと貶したのは、『大日経』の「四分之一」の文によつて四妄執を立て、第四の微細妄執を超えていないから「無明の辺域」なりというのであるが、実は「四分之一」は惑障に四段階があるという意味ではなく、初地以上の智品の分別である。故に空海の義は『大日經義釈』に相違しているという新見解。

11、尋云涅槃經云如法華中八千聲聞等云云、指何聲聞耶、答就之法相天台諍有之、法相宗ニハ萬二千聲聞中ノ八千ヲ指ト云云、意(序品の)万二千中四千決定性故於法華不得授記、八千不定性故於法華得記、仍勸此文、法華得記ノ聲聞ヲ不定性ト申也ト、天台ニハ非萬二千指持品八千申也、授決集又便示次品八十五文決十五正法華歡悅品云、八千比丘、復白佛言、大聖自安、勿以爲慮、亦當宣布他方、妙本云、學無學八千人得受記者、亦願他方流通、此經、涅槃、如來性品、如法華、八千聲聞、得授記、如秋收冬藏更無所作、而或經本云、八千比丘、仍解釋不同、今天台疏據此妙經決爲八千、冥同正本譯(報恩抄私見聞16ノ五)

〈メモ〉『大般涅槃經』の「法華八千声聞」は「法華經」勸持品で他土流通を願ひ出た「学無学八千人」を指す  
ということについての検討。

12、私云記主往々多破「慈恩」、彼不レ明「界外」故唯屬「藏通」、彼云「破二明」不レ會「菩薩」、若爾歸「一者應レ歸藏佛」、  
故以「彼佛」屬「婆沙佛菩薩」也、（同 16ノ二七）

〈メモ〉六祖湛然がしばしば法相宗の慈恩を破したのは、慈恩は界外（三界の外）を云わないから、三藏教と通  
教にのみ視野を置いたことになり、菩薩を開会しないから破二明一といつて破三明一といわず、その一も藏仏に  
外ならない所を破したのであると。

13、凡無畏一行、義ハ眞言天台理圓云云、新來眞言家、空海、義ハ天台法華宗ヲハ事理俱ニ密教ヨリモ劣也云云 故ニ無畏、  
說ヲ一行筆者トシテ書玉フ大日經、疏ニハ大相違セリト云事ヲ泯ニ筆受之相承トハ書玉ヘリ、（同 16ノ三七）

〈メモ〉最澄の「依憑天台集」の序に「新來の眞言家は筆授の相承を泯し」とある句についての解釈。解釈もい  
ろいろあるが、これは「日蓮聖人遺文辞典」歴史篇の解釈と同じ。

14、御書云、妙樂彼（吉藏）ヲ責云ニ毀在其中ニ等云云、尋云其毀者如何見タル耶、疏八云有師解、已是般若、當是  
涅槃、法華之前小大相隔、法華已後已得會同、此經正是會三之始歸一之初、故言「第一」、尋云此義何由毀「法華」、  
義可レ云耶、答彼師意法華ヲ三說ノ中ノ今說ト云フが故ニ、毀「法華」義也ト判玉ヘリ、仍本書ニ歎「法華」在「三」已今當  
外、此師闕「一節」云云、妙樂消之、毀在其中ニ何成弘讀、嘉祥猶然况復餘者云云（同 16一七二）

〈メモ〉法師品ノ「已今當說最為難信難解」の解説の中で湛然の「文句記」は三論宗の吉藏の解釈を責めて「毀  
其の中に在り」といったが、その意味は吉藏が「今說とは法華である」といったからである。実は今說とは「無



量義經』を指し、『法華經』は「已今当の外」なのである。

15、御書云、圓澄ハ寂光大師天台第二ノ座主也云云、或天台宗抄云、日本四大師者傳教、弘法、慈覺、智證是也、本朝ノ大師ノ御釋ナドト公場ニテ可申也、其外ハ私ノ大師ヲバ論席等ニテ本朝ノ大師トハ不レ可云也云云、尋云私大師者何等耶、南山大師相應和尚慈覺弟也、大樂大師慧亮和尚、別當大師光定、修禪大師義眞、寂光大師圓澄、慈慧大師良源

〔メモ〕朝廷からの贈与ではなく、私大師号の人々の列名。

16、眞言教ニハ理具加持顯得、三種即身成佛明レ之見タリ、然ニ理具顯得、二種ハ餘家ニモ可レ談レ之、加持ノ即身成佛殊以密宗希奇也、凡加持者行者ノ三業ノ清淨ナルハ持也、諸佛由レ之加レ應レ之處ヲ加ト云也、諸佛ノ應ヲ加玉ヘバ凡夫ノ當體ニ不思議ノ神變等ヲモ現也、サレドモ猶是凡位ナルガ故ニ體凡夫ノ形ニ還ル也、仍嵯峨宗論時、弘法現ニ毗盧遮那身、即還本身玉ヒシ、是併加持ノ即身成佛ノ現證也、所詮如レ此加持ノ即身成佛密教ニ限ル處ヲ宗論ノ時ハ顯玉フ也云云、私云如レ此規模ニ申處ヲ天魔ノ所變ト知ルハ、豈非本化智用乎、貴貴 (同) 16—八九—九〇

〔メモ〕空海が『孔雀經音義』の中で、自分は「金色ノ毘盧遮那と成り、すなはち本体に還帰す」といつているのは、加持の即身成仏のことであると。

17、御書云、我滅度後後五百歲中廣宣流布於閻浮提無令斷絶惡魔魔民諸天龍夜叉鳩槃荼等得其便也等云云、疑云諸天龍神等於法華可レ加擁護見タリ、今何魔類出レ之得其便也等宣玉フ耶、答此事一處ノ御書ノ中ニ御評判有レ之、出レ之可レ知レ之也、御書(顯仏未來記 定七三九)云如レ文兔先生持得、四味三教乃至外道人天等法、今生受ニ惡魔諸天諸人等身、兔見聞圓實行者、可レ致留難之由說之云云、

〔メモ〕薬王品に「詣天竜神」とあるのはおかしい。元來は擁護の神ではないかということに就ての吟味。

18、次身延澤ト申也、此名ヲ呼歟、又身ヲ延ルト云ヘル名言一入祝言ニ聞歟、或人云小湊池上身延澤何水邊字也、定有<sub>レ</sub>意歟、所詮萬人潤<sub>ニ</sub>本化<sub>ニ</sub>法水<sub>ニ</sub>ベキ義歟、又水ハ物<sub>ヲ</sub>令<sub>ニ</sub>生長<sub>ニ</sub>徳有<sub>レ</sub>之故歟、  
（身延山御書見聞 16—三八二）

〔メモ〕小湊、池上、身延沢はいづれも水に縁があるが、その訳は云云と。

19、一、住家御住房ナルベシ、當寺本堂跡是也、初房以外草屋ニテ御座ケルニヤ、以後十間四面御房造立有<sub>レ</sub>之見ヘタリ、今本堂柱大概其御房柱ヲ殘置ルトヤラン古老僧申傳タリ  
（同 16—三八二）

〔メモ〕日朝上人が身延山上に造立した本堂の柱は、日蓮聖人が最後に建てられた十間四面の房の柱を使用して  
いるということか。

20、尋云華嚴別教ト般若別教起盡如何、答推<sub>レ</sub>之華嚴別教ハ以別助圓別也、般若別教ハ以通助別別也、

（曾谷入道書見聞16—四一〇）

〔メモ〕『華嚴經』が兼ねている別教は円教を助けるための別教であり、『般若經』が帯びている別教は通教によつて助けられる別教（別接通知）であると。

一、（法門可申抄云）山寺ノ小兒ノ俱舍讀等事 或人云、古今俱ニ四ヶ寺ニハ小兒ノ學問ハ俱舍論也、サレバ山門中古名匠東陽和尚童體時、西塔維那戀ノ歌ヲマヒラセケルトナム申傳タリ、

我戀ハ滅道諦ノ惑ナレヤ、思ヘト君ハ隨増モナシ 維那

我戀ハ苦集二諦ノ惑ナレヤ、思フ人ニハ隨増アラム 兒

此歌ハ兒モ法師モ俱舍論ノ諸漏於<sub>レ</sub>中等隨増故等<sub>ニ</sub>文意ニテ讀玉ヘル也

（如說修行抄見聞 16—四四〇）

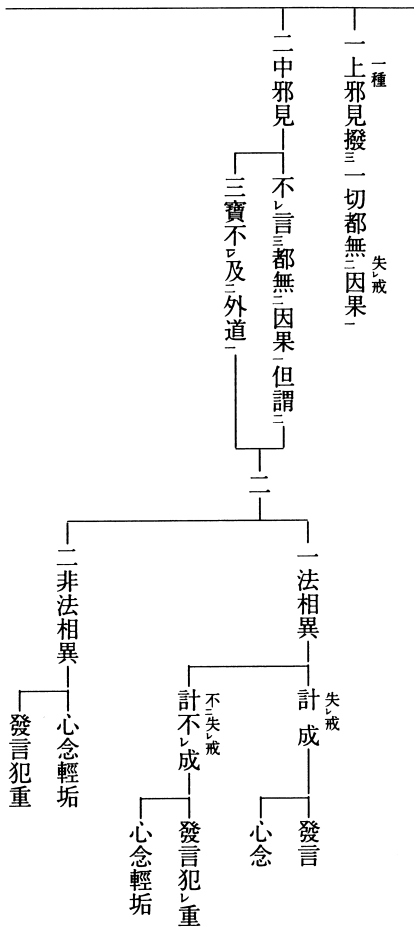
〈メモ〉山寺の小僧には『俱舍論』を読む習いがあるとされる事例。

21、(俱舍)頌疏八云、梵云三那落迦、此云三苦具、義翻爲三地獄、以地下有獄故、非正翻也、集解云、其字從言從二犬者、所以守也、若此方獄阜陶所造也、私云篇モ作モ犬多也、中ニ言アリ犬ノ人ヲ吠ル義也

(顯謗法抄私見聞 17—161)

〈メモ〉地獄の説明ユニーク。

22、御書云、謗ニ上中下雜アリ等云、私云、此事ハ梵網十重禁ノ第十謗三寶戒ヲ釋ル下ニ見タリ、其要文一代五時記(定遺未収録カ)第十七帖出レ之可見レ之指レ之歟、梵網疏云、邪見推畫、條緒乃多、畧有四種一上邪見、二中、三下、四雜



六種  
三下邪見 同上 棄レ大取レ小

四雜邪見 — 一偏執 — 一執レ大謗レ小 — 犯輕垢

二偏謗一部 — 計成輕垢

二雜信 — 計成輕垢

三暫念小乘 — 計成輕垢

四思義僻謬非罪

尋云、中下邪見、中法相異、非法相異、其意如何、義云、法相異、意實三寶不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>外<sub>一</sub>、思、小乘勝<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>名<sub>一</sub>、法相異、是即定<sub>二</sub>勝劣<sub>一</sub>、法相<sub>一</sub>、故也、非法相、意<sub>二</sub>三寶勝<sub>一</sub>、外道<sub>一</sub>、大乘勝<sub>二</sub>小乘<sub>一</sub>、思<sub>二</sub>へドモ口<sub>一</sub>三寶劣<sub>二</sub>外道<sub>一</sub>、大乘不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>小乘<sub>一</sub>、説也、是意不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>勝劣<sub>一</sub>、故以<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>名<sub>一</sub>、非法相<sub>一</sub>也、可<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>之、

（同） 17—21—22

（メモ） 四種謗法の解説

### 三、佐渡前後法門異相

1、尋云本化迹化、弘經師各別ナルベシ、何<sub>レ</sub>天台沙門書<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>玉<sub>一</sub>耶、答凡<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>吾宗<sub>一</sub>ニ<sub>二</sub>血脈<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>之、委<sub>レ</sub>餘所書<sub>レ</sub>之、仍<sub>レ</sub>今天台傳教<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>師資<sub>一</sub>、相傳立<sub>二</sub>玉<sub>一</sub>ヲ一筋ナルベシ、或義云於<sub>二</sub>元祖<sub>一</sub>、御弘通<sub>一</sub>、始<sub>レ</sub>末有<sub>レ</sub>之、始<sub>レ</sub>津方天台沙門根本大師門人等書玉<sub>一</sub>へリ、未津方御書撰號<sub>一</sub>或本朝沙門扶桑沙門ナンドト書玉<sub>一</sub>へリ、凡安國論ニモ文永六年御自筆<sub>一</sub>、本ニハ天台沙門無<sub>レ</sub>之、其本下總中山有<sub>レ</sub>之、又建治年號ニテ再治安國論トテ有<sub>レ</sub>之、其本ニモ天台沙門言無<sub>レ</sub>之、所詮此等<sub>一</sub>、用與適時化道ニテ

可有之也、 (安國論私抄 15—131)

〈メモ〉 聖人の撰号の推移

○撰號事 尋云元祖上人忝本化降誕見タリ、何迹化垂迹タル天台爲祖師、天台沙門等書玉フ耶、答此事尤可存三知之歟、凡御書撰號色色見タリ、安國論ニハ天台沙門等云云、其以後三大部觀心(本尊)鈔等ニハ或本朝沙門或扶桑沙門或釋子等書玉ヘリ、又安國論ニモ文永六年御眞筆下總中山ニ有之、天台沙門無之、又建治年號再治本ニモ無之見タリ、此等ハ用與適時意ニテ御坐之與、傳云凡人ハ御弘通始終有之、初津方大概天台沙門或根本大師門人等書玉ヘリ、末津方御書別不出之、所詮初隨他意、義門存玉ヘリ、以後隨自意邊見セ玉フト習也、尋云天台傳教門人書玉事、何由隨他意邊可レ得心耶、答凡今家師資相承兩邊有之、此事一通御書有之、其下委書之可レ見之、大概述之、天台等爲祖師、玉フハ外相邊見タリ、是即五時八教等ノ教相依用シ玉フ邊也、内證血脉上人御開悟爲本、直以釋迦上行爲祖師、玉ヘリ、サレバ初津方御書ニハ外相師資相傳爲本、天台門人等書玉ヘリ、是非御本意、只是念佛禪戒等ヲ破シ玉フ日、暫天台宗ライタハツテ如レ此書玉ヘリ、是即隨情、義門也、以後内證御相傳顯シテ或釋子トモ或本朝共書玉ヘリ、是隨自意顯シ玉フ事勿論也、返返此趣餘所有之追可レ尋之、 (同 15ノ一五五—一六)

〈メモ〉 聖人の撰号の推移。

2、傳教眞慈覺智證等云云事 疑云處處御書慈覺智證謗法等云云、今何依用アル様書レ之玉フ耶、答御一期化導始終有之、隨他隨自重重也、佐渡以前就彼法門隨情邊有之云云、此等也委餘所書レ之、 (同 15ノ一八一)

〈メモ〉 台密の慈覺、智証批判は「佐渡以前」の御書には見えない。

3、尋云、唱法華題目抄ニハ色色ヲ舉玉ヘリ、今何只題目擧耶、答、凡就御本尊始終弘通其不同有之見タリ、唱

法華題目抄ハ文應元年庚申五月廿六日之云云、其比未如御内證然、然ト御本尊ノ様ヲバ弘玉ハズ、次第次第二甚深ニ仰出タリ、文永建治ノ年號マデハ尙以素意ヲ殘シ玉フ歟、弘安年中ノ御本尊ニ正ク素意ヲ書顯シ玉フト習也、サレバ本尊問答抄ハ以前ヨリ一入本尊ノ意趣ヲ顯玉フ、故ニ末法相應ノ御本尊ヲサシ當テ以三題目ニ爲三本尊ニ云云、此條一段ノ相傳ノ趣也、始終ノ御本尊ノ習連連可レ書レ之、此事深可レ存知也、努努不レ可レ聊爾ニ云云、

（本尊問答抄私見聞 13ノ八九）

〈メモ〉「唱題抄」は文應元年の御書であるから、御本尊の様を「第一に本尊は法華經八卷、一卷一品、或は題目を書いて本尊と可レ定、法師品並に神力品に見えたり。又たへたらん人は釈迦如来・多宝仏を書いても造ても法華經の左右に可レ奉レ立レ之」（定遺二〇二頁）とて、正しくは述べておられない。弘安二年以後まさに提婆・阿闍世を加えた十界勸請の様が図顕された。

4、私云、御法門ノ初ハ建長五年癸丑ナリ、八年後文應元年庚申御書也、此頃ノ御書等ハ可レ存知一事有レ之、追可レ申也  
（唱法華題目抄事 17ノ一五〇）

〈メモ〉「存知すべき事これ有り」とは聖人一期の化導の始終についてである。

#### 四、施開廢と折伏と

1、仍當世諸人諸乘一佛乘ト開會ス等云云、此義ハ專當世天台宗學兔ノ申趣ト覺タリ、

○大莊嚴等ノ八萬大士、施權開權廢權ノイハレヲ得意分玉ヒテ領解シテノタマハク等事、傳云就施開廢三三重習有レ之、別可レ傳之、仰云凡就次第能能可レ得心仔細有レ之、施開廢ハ佛意爲レ本次第スルナルベシ、施權廢權開權ハ

機情邊爲本次第二テ有之也、尋云此約束未得其意、凡據其法體問廢俱時ト釋スレバ、佛意ハ開廢次第不可有レ之下覺タリ如何、答凡施開廢次第ハ玄文止觀處處ニ其色色ヲ分別シ玉ヘリ、餘所大概書レ之、今取レ要可レ申レ之、今御義ニ開廢ハ佛意次第云ハ籤一先示方便即是眞實、既識實已永不用權ノ釋意ト覺タリ、廢開ハ機情次第ト云ルハ、十重顯一時破廢開會ト次第スルヲバ、前四重免機情昇進ト釋スル可思レ之、サレバ約機邊ニテハ何ニモ廢ヲ爲先、

(如說修行抄見聞 16ノ四三三)

〈メモ〉蓮華三譬のときの「施・開・廢」は仏意を本と爲す次第で、開廢同時である。開會されれば所開の權教の名はないから。「施廢開」は「玄義」の十重頭一の次第であり、機情に約した次第である。

2、又云又一切聖教不出三四悉、故四悉中世界爲人即攝受意、對治即是折伏意也云云

○法華涅槃攝折二門配立重重有レ之事 尋云法華折伏破權門理等云云、是レ玄九釋也、文句止觀釋ニハ法華攝受、涅槃折伏等云云、相違如何、答凡就攝折ニ重重相貌有レ之、先教行異有レ之、仍就教攝折ヲ判ズル時、玄九ニ破權門理等云云、法華折伏涅槃攝受此義也、又就行攝折ニ言レ之、安樂行、遠離豪勢、或不稱長短等云云 是行攝受也、大經持弓帶箭等行折伏ニテ有レ之、可思レ之、尋云法華ニ行折伏有レ之乎、答頭破七分等云云、尋云涅槃ニ行攝受有レ之乎、答住一子地等云云、尋云上件就攝折ニ教行不同有レ之由聞了、抑如レ此施設スルハ所用何事耶、答處處釋義ニ攝受折伏ヲバ適時而已云云、尋云先就大經ニ破法人ヲ禁トシテ、或斷命根、或駈遣等云云、何時可レ用此折伏乎、涅槃疏云、出家在家護法取其元心所爲、棄事存理、匡弘大教、故言護持正法、不レ拘小節、故言不修威儀、○昔時平而法弘應レ持レ戒、勿持レ杖、今時峻而法翳、應持レ杖、勿持レ戒、今昔俱峻、應俱持レ杖、今昔俱平、應俱持レ戒、取捨得レ宜不可ニ一向ニ尋云若折伏時攝受ヲ行セバ可レ有レ何失一乎、涅槃經三云、若善比丘見壞法、兔置不呵責駈遣

舉處<sup>セ</sup>、當<sup>レ</sup>知<sup>ハ</sup>是人佛法中怨<sup>ノ</sup>、若能<sup>ク</sup>駢<sup>シ</sup>遣<sup>シ</sup>呵責<sup>ス</sup>舉處<sup>ハ</sup>、是我弟子真聲聞也、涅槃疏四云、若善下結、即判<sup>ス</sup>眞僞<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>治<sup>レ</sup>毀禁<sup>、</sup>壞<sup>レ</sup>亂佛法<sup>、</sup>佛法中怨<sup>、</sup>無<sup>レ</sup>慈詐親<sup>、</sup>是彼人怨<sup>、</sup>能<sup>ク</sup>糺治<sup>ス</sup>兎<sup>、</sup>是護法聲聞<sup>、</sup>眞我弟子<sup>、</sup>爲<sup>レ</sup>彼除<sup>レ</sup>惡<sup>、</sup>即是彼親<sup>、</sup>能<sup>ク</sup>呵責<sup>ス</sup>兎<sup>、</sup>是我弟子<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>驅遣<sup>レ</sup>兎<sup>、</sup>佛法中怨<sup>、</sup>尋云如<sup>レ</sup>今<sup>、</sup>御書<sup>、</sup>末法今時ハ折伏ノ如說修行ヲ用<sup>云</sup>云<sup>、</sup>所<sup>レ</sup>言折伏<sup>、</sup>兎教折伏<sup>、</sup>行折伏<sup>、</sup>歟<sup>、</sup>答見<sup>レ</sup>御書<sup>、</sup>始終<sup>、</sup>上人所用專教折伏ト見タリ<sup>、</sup>尋云行折伏ヲ用ル義<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>歟<sup>、</sup>私云安國論云<sup>、</sup>夫釋迦之以前佛教雖<sup>レ</sup>斬<sup>ニ</sup>其罪<sup>、</sup>能<sup>レ</sup>仁<sup>之</sup>以後經說<sup>、</sup>則止<sup>ニ</sup>其施<sup>等</sup>云<sup>云</sup>、尋云大經所說<sup>、</sup>執持刀杖等ノ行折伏ハ、正像末中ニハ專<sup>、</sup>何時ヲ說玉フ乎<sup>、</sup>答經說相ハ專正法時歟ト覺タリ<sup>、</sup>其故ハ持戒人制<sup>ニ</sup>破戒比丘<sup>、</sup>時ノ相ヲ說玉フト見ヘタルガ故也<sup>、</sup>但何時也トモ國王等ノ威力ヲモテ護<sup>ニ</sup>持正法<sup>、</sup>時<sup>、</sup>若背<sup>ニ</sup>王命<sup>ニ</sup>壞<sup>ニ</sup>正法<sup>、</sup>斷<sup>ニ</sup>命根<sup>等</sup>ノ事<sup>、</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>歟<sup>、</sup>尋<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>

（同 16—四四四—五）

（メモ）法華・涅槃の兩教を比較すると撰受、折伏に約教と約行との區別があるという見解は、早くも朝師に見えるところである。